動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」（日本道路公団東京第一建設局　昭和57年３月31日発行）
４）田中　豪　「館林遺跡」（註(3)の報告書所収）第Ⅱ編第４章　ｐ50の27行目～28行目
５）財団法人千葉県文化財センター編集　「佐倉市立山遺跡」（千葉県土地開発公社　(財)千葉県文化財センター　昭和58年３月10日発行）
６）註(5)のｐ189の19行目（この項金丸　誠執筆）

〔補足〕

稿了するに当って，次の点を補足しておきたい。

１．三つのパターンは，その余地の利用の方法によって，畑地利用型，墓域利用型，森林利用型に細分できるのでなかろうか。個々の内容について検討すべき点が多いので，本稿では細分しなかった。例えば，腰巻パターンは住居跡群の大部分が台地斜面にあり，台地上を余地として利用し，その主が畑作の用途と推考したのである。これをまとめれば次のとおりである。

(1)腰巻パターン　➡　(ｱ)畑地利用型
(2)館林パターン　　(ｲ)墓域利用型
(3)立山パターン　　(ｳ)森林利用型

腰巻遺跡は腰巻パターン，畑地利用型であり，例えば佐倉市松向作遺跡が該当しよう。また，八日市場市飯塚字真口塚地先に所在する真口塚第２遺跡は，（八匝遺跡調査会が昭和58年度に調査した。担当者は福間　元氏。八匝教育委員会藤崎宏道氏に御教示いただいた。）台地上に古墳があり，斜面に住居跡群がある。整理中であるので定かでないが，腰巻パターン墓地利用型と考えることができまいか。これはその内容を含め，今後の検討課題としたい。そのためには，住居跡及び個々の住居跡における遺物等の綿密な分析が望まれる。

２．台地斜面の住居跡群について三つのパターンを提案したが，これは下総台地におけるあり方を類型化したものであり，他の地域のそれと対比するに当たっては十分検討を加える必要があろう。さらに，遺跡の性格・内容にも十分留意しておかねばなるまい。

すなわち，遺跡立地論は，台地上・台地斜面という住居跡の立地と余地の利用法を総合的に考え，さらに遺跡の性格をも組み込んで分析してゆくことが必要であろう。

（昭和59年６月20日稿了　主任調査研究専門員）

墨書土器を考える

根本　弘

１．「檜前（ひのくま）」

(1)

枕刀腰（まくらたし）に取り佩（は）き真愛（まかな）しき
背ろがめき来（こ）む月（つく）の知らなく
右の一首は，上丁（かみつよぼろ）那阿郡の檜前舎人石前が妻大伴部眞足女のなり

武蔵の国那珂郡の防人，上丁，その妻の惜別の歌が「万葉集」第20巻4413にある。

1981年に刊行された当センターの報告書「公津原」のLoc14遺跡から「檜前」と墨書された土器２点が出土したと報告されている。また，昨年発掘した「酒々井町伊篠遺跡」からも「檜前」とおぼしき墨書土器の出土が，当センター「年報９」に報告されている。文献にでてくる「檜前」が意外と身近かなところからみつかった。

「檜前」は，もともと地名であり，「倭名抄」にもでてくる奈良県明日香村の檜前である。「日本書記」宜化天皇元年正月の条には「都を檜前盧入野に遷す。よって宮の号となす」と記載されている。「続日本紀」では伝承として応神天皇の時に阿智使主等の渡来人に「檜前の村を賜って居しむ」として「檜前」を名のる人々よりさきに地名としての「檜前」が存在していたことを伝えている。

ともかく，私たちの身近かな所に「檜前」があるという事実から「檜前」について少し調べてみた。

(2)

「檜前」の人々については，「続日本紀」宝亀３年４月の条に「檜前の忌寸を以て，大和国高市郡司に任ずるの元由者，先祖阿智の使主，軽嶋豊明の宮に駆宇(アメノシタシロシメス)天皇の御世(応神)，17県の人夫を率いて帰化せり……」と記

され，この伝承は「新撰姓氏録」によると「姓氏録第廿三巻に曰はく，阿智王，誉田天皇応神の御世に，本国の乱を避けて，母，並に妻子，母の弟，辻興徳，七姓の漢人等を率て帰化(まうけ)り。七姓とは第一を段といふ。是，高向村主，高向(たかむく)史，高向調使，評首，民使主首等の祖なり。次を李姓といふ。是，刑部史の祖なり……次を多姓といふ。是，檜前調使等の祖なり。天皇，其の来(まう)ける志を矜(あわれ)みたまひて，阿智王を号けて使主と為したまふ。仍て大和国檜前郡郷を賜りて之に居れり」と書かれている。

この伝承をすべて信ずることはできないとしても，ある時期に，中国大陸または朝鮮半島から渡来して来た人々がいて，「檜前」の郷に代々住居を持っていたことは疑いないと考えられる。さきに引用した「続日本紀」の続きに「およそ高市の郡内は，檜前の忌寸及び17県人の人夫地に満ちて居

檜　前　人　名　表

年　代	人　名	居住地	地位・職等	出　典	備　考
神亀3年（726）	檜前首志米売	山背国	戸主妻	寧上154，1－353	
天平5年（733）	檜前部売斐売	大和	椋垣伊美吉	1－500	
			意伎麻呂の戸口	寧上143	
〃	檜前部意富佐意	大和	同上	同上	
〃	檜前馬長	大和	経師・書生	7－34，9－46	
天平7年（735）	檜前女王	（大和）？	従4位上（天平9年）	寧上291，続紀	相模国御浦郡に食封40戸
天平10年（738）	檜前村主稲麻呂	丹後	史生	但馬正帳	
〃	檜前舎人馬養	大宰	史生	周防正帳	
〃	栁前舎人（名欠）	駿河志太郡	少領	駿河正帳	
天平11年（739）	檜前麻呂	大和	校生	7－418 他	舎人ともみえる746まで記事あり
〃	檜前家麻呂	大和	経師	寧中547 他	天平1～19
感宝元年（749）	檜前部君賀美麻呂	上野	佐位郡大領	正裂銘72	
〃	檜前部黒麻呂	上野	戸主	正裂銘72	
天平勝宝2年（750）	檜前久比麻呂	大和	経師	9－46	751にも記事あり
天平勝宝7年（755）	檜前舎人石前	武蔵	防人	万葉20－4413	
天平宝字4年（760）	檜前豊虫	（大和）？	経師	14－405，363 他	東寺写経
天平宝字5年（761）	檜前佐波麻呂（鯖麻呂，鯖万呂）	大和	経師	15－112，17－214，234，537 他	宝亀元年(770) まで記事あり
天平宝字6年（762）	檜前村主家刀自	大和		寧下633	
天平宝字7年（763）	檜前濱嶋	大和	東大寺司々人	16－319，184	
〃	檜前羊	大和	仕丁	16－180	
天平宝字8年（764）	檜前石万呂	大和	仕丁	5－472～475	
天平神護元年（765）	檜前舎人直建麻呂	上総海上	（上総宿称）正六位上→外従五位下（神護景雲元年）	続紀	
〃	檜前忌寸（一族の名称）？	大和	内裏に宿衛	続紀	
				文徳（平安元年）	伊美吉姓を賜う
天平神護2年（766）	檜前老刀自	佐位郡の人 上野	外従五位上→上毛野佐位朝臣(景雲2年)	続紀	
宝亀元年（770）	檜前舎人連安麻呂			平木概4－8	
宝亀2年（771）	檜前舎人諸国	遠江・城飼郡	主帳	続紀	
承和7年（840）	檜前舎人由加磨	武蔵・加美郡	正七位勲七等	続後紀	
斉衡元年（854）	檜前淡海麻呂	美濃郡	大領	文徳	
天慶4年（880）	檜前宗(廣)範	丹波	史生	三代	
天暦3年（949）	檜前宿称公子	（山城）？		平遺No.0256	

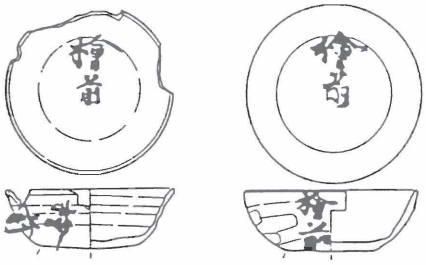
※　出典は，次のように略記した。「寧遺」→寧楽遺文，「1－135」→大日本古文書，「続紀」→続日本紀，「但馬正帳」→但馬国正税帳，「正裂銘」→正倉院古裂銘文集成，「文徳」→日本文徳天皇實録，「平木概」→平城官発掘調査出土木簡概報，「続後紀」→続日本後紀，「三代」→三代實録，「平遺」→平安遺文。

す。他姓の者は十に一二なり」と書かれ，かなり多くの「檜前」と称する人々及び渡来系の人々が高市郡内にいたことがわかる。こうした渡来系の人々は，渡来以来すでに長い年月がたっており，大和だけでなくすでに各地に散っていた。「続日本紀」「寧楽遺文」「続日本後紀」及び古代の人名を集大成した「日本古代人名辞典」等からその記事等をひろい出してみると，人名表のようになる。

地域的にみると大和が圧倒的に多いのはうなずけるが，特に東国の上毛野国の記事が目につく。感宝元年（749）の正倉院に残る銘により，上野国佐位郡には，檜前部君賀美麻呂という大領がいたこと。さらに天平神護2年（766），檜前老刀自が従五位上に任ぜられ，翌年には朝臣をもらい，4年後には正五位に昇任している。（続日本紀）また，上総海上の檜前舎人直建麻呂は，「続日本紀」によると，天平神護元年には正六位から従五位下に，神護景雲元年（767）には「上総宿称」の称号が与えられている。上野国とはちがい正五位への昇任はないが，いずれにしてもこれらの記事は，大和と東国の結びつきを考えさせる材料になる。

すでに各種の論文に書かれていることだが，天皇の名代，子代として東国各地には刑部，日下部といった部民がおかれていた。上野国の「檜前」も海上の「直建麻呂」もかって設置された部の出身と考えられていた。このことからも中央との結びつきは考えられるが，特に8世紀の中葉になり昇任記事が多くなるのは別の考え方をした方がよいと思われる。すなわち，渡来系部民の人々は，中央からはなれた地域で，中央の拘束を受けながらも独自の地位を確立していく姿とみた方が，より現実的と思える。東国の経済基盤を背景とする実力が，中央の東北・東国経営の中で利用された一つの形といえないか。

東国における「檜前」，上野国，上総国だけでなく，さきに引用した万葉集等からも武蔵国にもいた。東国広範に「檜前」がいたことから，下総の公津原や酒々井で墨書「檜前」が出土することは何の不思議はないし，これからも上総，常陸を含め，もっと出土することは予想される。

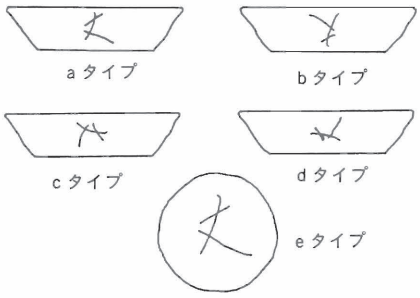


009－A号址出土遺物　　054号址出土遺物

しかし，「檜前」の人が公津原や酒々井に定住していたかどうかは検討する必要がある。

(3)

墨書土器「檜前」（公津原，Loc 14 遺跡出土）をみると，同じ遺跡の他の墨書土器とははっきりしたちがいがある。1979年佐倉市教育委員会で刊行した報告書「江原台」では，墨書の書かれ方を下図のように分類している。



これにしたがい，公津原Loc 14，15，16遺跡の墨書土器を分類すると下表のとおりである。

墨書位置分類表（公津原Loc14，15，16）

	a	b	c	d	e	その他	不明	計
Loc14	26	0	4	2	19	4	9	63
Loc15	37	0	12	2	59	3	32	145
Loc16	8	0	2	0	21	2	11	44

※①数字は点数を表わす。
②Loc 14～16をとりあげたのは，集落はちがうが，共通した墨書文字「私得」「辛甲」「甲」「中」と相互に各遺跡で出土していて関連が強いと考えたから。なお，墨書文字と集落については稿をあらため検討してみたい。
③「その他」の欄は，「檜前」のように側面と内部の底に書かれたものとか，字はちがうが，同様に側面「加」内部底「神奉」，あるいは内部底だけに「寺」といったように表中5分類以外のものを入れた。
④「不明」はa～dまでいずれか不明のもの。

墨書の書かれ方は，地域，時間，技術等により異りそれぞれ意味を持つと考えられるが，その検討は別にゆずるとして，公津原では側面と底部に墨書されるのが一般的で，表の〝その他〟ののように2か所に書かれるものや内部に書かれるのは例外といってよい。こうした中で2点の「檜

前」が側面と内部底に書かれていることは，はっきり特別な意味を持つものとして書かれたと考えてよい。

「檜前」はもともと地名であり，そこに住んでいた人々，または「檜前女王」のように関連する人々を「檜前」の某と呼称したことは前にみてきたが，人間の呼称、名称だから墨書する位置が特別とは考えにくい。さきに引用した江原台遺跡では，人または集団（部）の呼称「丈」が10点ほど出土しているが，書かれている位置は，底部，側面ばらばらで特に統一性はない。しかし，統一性がないといってすべての人間呼称が書かれる場合，ばらばらとはいえまい。この「檜前」 2点は，009，054址と出土遺構はちがい，出土についてはそれぞれ独立性を持つが，書かれ方は統一されている。また，書体などから同一人の手によって書かれ，同時期の同じ意識のもとに書かれたもので，この場合人間の呼称でもあるが，「丈」のように多数の不特定の人たちを指すのではなく，特定の人間を指すものと考えた方がより合理的であろう。

では，特定な人物とはどんな人か，ということになるが，渡来系「檜前」ということと，奈良を中心に居をかまえている人たち，あるいは上海上の地方官などの系譜から，何らかの技術を持った人であったと考えられる。その技術とは何か，推測の域は出ないが，「檜前人名表」の職業から推して，史生，経師といった文字に関係するものか，舎人や内裏の警備の記事などから軍事に関係するものかわからないが，新しい文化をもたらした人であることはまちがないであろう。墨書が特別な書かれ方をされるのはそれなりの理由がなければならず，この意味でも「檜前」は，特別な人と解した方がよいと思われる。

墨書土器の研究はその出土量にくらべ研究はまだ未開拓といえる。土器型式からの分類研究もさることながら，墨書文字の意味，集落と墨書，文字の集落間交流，文字による集落の独立性の摘出等々，やらなければならないことは山積している。さきにあげた公津原の墨書位置分類だけみても，Loc 14，15，16では明らかなちがいをみせている。これらのことについては次回で考えてみたい。

（調査部長補佐）

縄文時代における「領域」「集落」小考

清　藤　一　順

はじめに

現代社会に生きる我々は，その複雑な構造故に，多種，多様な関係の上に存在している。これらの多岐にわたる関係は，同時に，多様で広範な活動空間を有するという結果を生じさせている。

我々にとっての活動の「場」は，日常寝起きする「すまい」，日々の労働を行う職場，食料衣料品等を購入する小売店，デパートなど，そして，それらを結びつけている交通網，この他にも，我々の目的により，多くの「場」が存在している。

これらは，日常寝起きする「すまい」を中心に，放射状，樹枝状に複雑な図式を描き，現代の人間が存在して行くために必要，不可欠な枝，葉，根としてある。

遡り縄文時代でも，現代ほど複雑多様化はしていないが，決して単純ではない関係，「場」が存在していたことが，様々な遺跡の，かたち，内容から見る事ができる。

多数の住居跡や，さまざまな遺構を多数伴う遺跡，これらの小規模な遺跡，落し穴状の土坑などのみが検出される遺跡，土器や石器などの遺物が出土し，人間が活動した痕跡は認められながらも，遺構が検出できない遺跡（ローム層を掘り込んだ遺構が存在しない），丸木舟が出土した遺跡などのようにである。縄文時代でも，現代と同様，「すまい」を中心とした積極的な活動が行われたはずであり，これらが，異った遺跡の「かたち」「内容」として今日我々が見ることができるのである。こ